

# 教育相談における心理テストの利用

## ——不適応生徒の早期発見と指導法の発見——

新潟県立新潟東工業高等学校教諭 伊 藤 陽 一

### はじめに

高等学校における不適応生徒は年々増加の傾向にあるので、学校ではこれら生徒の早期発見が急がれている。そのための手段として、日常の観察や記録の分析が重要な役割をもつのであるが、それをより客観的に行なうため各種の心理テストが利用される。市販されているテストの種類は多いが、実際に活用するのが専門家ではないから、わかりやすさが要求されて選択に迷うことが多い。本校では昭和39年度から、集団用ロールシャッハテストと適応性診断テストとを実施して、不適応生徒の早期発見につとめるとともに、教育相談活動に利用してきている。ここでは、毎年実施している2つのテストについてその傾向と問題点などについて考察するものである。

## I 検査の実施計画

### 1 検査の種類

- 集団用、新訂人格診断検査、ロールシャッハ法改訂 金子書房  
(以下ロールシャッハとする。)
- 教研式 適応性診断検査 日本図書文化協会

問題行動や不適応行動があらわれる原因については多くの研究がなされているが、ここでは、そのような問題行動をおこしやすい傾向と誘因が結びついたとき、現実の問題行動があらわれると考える。不適応生徒の早期発見ということはそのような問題行動をおこしやすい傾向をもった生徒を見出すことになる。そこで問題行動をおこしやすい傾向を、自己統制力と社会適応状態から考えようとするのである。この自己統制力と社会適応の状態を集団ロールシャッハと適応性診断テストによってとらえることによって不適応行動を予測し、指導法を考えていこうとするのがこの2種のテストを実施するねらいである。

### 2 実施の時期

昭和39年度には全学年に実施し、その後は新入生全員に実施している。

実施の時期は1学期の中間考査の時(5月)集団ロールシャッハを行ない、6月になって学校生活に慣れたところをみはからって適応性診断テストを行なっている。

## Ⅱ 検査の結果

### 1 検査結果集計の観点

#### ① 集団ロールシャッハ

自己統制力が不良である基準として次の項目によった。

- (1) Keyー（キー・マイナス） 得点（異常傾向） 3以上
- (2) P得点（社会的意識） 0または7以上
- (3) 簡易診断項目（10項目）のうち5項目以上にチェックされたもの。

#### ② 適応性診断テスト

Prスケール（問題性尺度）のいずれかで30パーセント以下のも

### 2 問題性傾向をもつ生徒の判定

検査結果集計の観点にもとづいて、次の2つに該当する生徒を選び出した。

- ① 集団ロールシャッハの3つの観点のうちいずれか1つに該当するもの
- ② 適応性診断テスト観点到該当するもの

上の2つの基準の両方に該当する生徒の数を年度別にみると表1のようになる。

表1 クラス別該当者数（数字は実数，1クラス40名）

年度	クラス	1	2	3	4	5	6	7	8	計
39		12	12	4	6	16	13	11	13	87
40		4	14	7	12	9	9	11	12	78
41		9	9	7	12	6	12	4	16	75
42		6	17	9	15	11	12	15	9	94
43		12	8	11	15	10	16	14	16	102
44		11	10	5	11	9	3	10	16	75

### 3 検査結果と問題行動の関係

昭和39年度から42年度までの間に問題行動のあった生徒について、検査結果がどのようなものであったかを比較したのが表2である。

表2 問題行動とテスト結果との関係

問題活動の あった生徒	基準①か②に 該当するもの	①に該当 するもの	②に該当 するもの	①②両方に 該当するもの	両方に該 当しない
100 (%)	76 (%)	55 (%)	55 (%)	34 (%)	24 (%)

#### 4 検査使用についての考察

- (1) 両方のテストで何れもチェックされたという生徒の数は(表1)クラス別人数のとおりである。実際に問題行動をおこした生徒の76%が、両方のテストの何れか一方にのみチェックされている点からみて、二つの心理テストの両方を参考にした方がよいと思われる。両方のテストの何れにもチェックされていた生徒は34%にすぎない。このことはまた、24%が全然両方のテストの何れもチェックされていないことにも関係するので、(表2参照)心理テストを過分に信ずるのはまちがっているといえよう。
- (2) 両方のテストの予測率は、いずれも、問題行動をおこした生徒の55%が予めチェックされていたことからみて、同率であるといえよう。使用の難易は大体同様であるが、しいていえば、適応性診断テストの方が文字により表現されている点からみれば使用しやすいように思える。しかし、より深く精神内部の葛藤をみようとするならば、やはりロールシャッハを合わせて使用した方がよい。ただし習熟するのに相当時間がかかるので努めて練習する必要がある。
- (3) 生徒理解は、心理テストを加えた客観的総理解がよい。身上調査書や指導要録、またはその他の諸記録を参考にしながら、できるだけ多くの心理テストを行なうべきであると思う。よりよき生徒指導は、よりよき生徒理解をすすめようとする努力から生まれると思うので教育相談にはできるだけ多くの心理テストの資料を常に備えておきたいものである。

### Ⅲ 判定の事例

診断事例(1) M・S(高二) 男 怠学、家出、親に反抗すること多し

#### (イ) 集団ロールシャッハ・テストによる診断

- Key-(5) 異常傾向、社会環境に対する適応がわるいことが認められる。
- P 普通
- FM>3M 情緒の未成熟、衝動的に行動しやすい。
- F フラストレーションの結果生ずるといわれる行動の硬さがめだつ。

#### (ロ) 適応性診断テストによる診断

##### Ad類型(不適応傾向)

極端な不適応を示している。(7パーセンタイルより少ない場合に不適応と診断されるが、この生徒は、最低の1パーセンタイルを示している。)親の無理解、強制、不信感などの応答が多く、家庭生活が面白くない。親子関係に問題があることが認められる。

##### Prスケール(問題性尺度)

稀反応傾向、非社会的傾向には問題なし。

反社会的傾向に問題あり。攻撃的，反抗的，外罰的傾向を示しやすい生徒である。

下記の特徴を有する。

- 1 家庭および学校への適応がわるく，家庭でも学校でも安定感や満足感がえられない。
- 2 親や教師に対する不信感が強い。
- 3 友人や社会の人々から白眼視されているという被害感がつよい。
- 4 誘惑に負けやすい。あきらめがはやい。
- 5 自分の気にいらぬことは，たとえ規則でも従わない。
- 6 自分の体や容姿などをいつも気にしている。

#### C0 項目（カウンセリング参考項目）

- 1 学生生活はつまらない。
- 2 私は役に立たない人間だと思う。
- 3 他の人に比して不平や不満が多いとは思わない。
- 4 家出をしたいと思う。

診断事例（2） K・H 高1 男 怠業多し，学業不振，家庭に問題あり。自己の身体を非常に気にしている（体臭など）病的傾向あり。

#### (イ) 集団ロールシャッハテストによる診断

Key-(5) 強い異常傾向は認められない。

(8)

P 普通

CF+C>2FC 情緒不安定と診断される。

KF+K+kF 不安傾向

簡易診断チェック数

教育や訓練の効果が普通の方法ではあがらない。心理的原因による病的な反応があらわれる。不適応。

#### (ロ) 適応性診断テストによる診断

Prスケール（問題尺度）

Ex 反社会的傾向が強い。

- 1 学校や家庭への適応がわるい。
- 2 友人や社会の人々からきらわれているという被害感がつよい。
- 3 教師や親，医師に対して不信感をもっている。
- 4 自己の身体を気にしている。

※ H（家庭） 特に親子関係について異常に？反応が多くあらわれている。

診断事例（3） K・I 高2 男 飲酒，喫煙，不良交友，怠業，奇妙な衝動的動作が多くみられる。

(イ) 集団ロールシャッハ・テストによる診断

Key- (5) 強い異常傾向は認められない。

(8)

P 普通

FM 素朴な欲求を直接的に充足しようとする強い衝動傾向が認められる。

(ロ) 適応性診断テストによる診断

Prスケール（問題性尺度）

- 1 家庭に対する適応がよくない。親の指導力が弱いところから親に対する不信感がみられる。しかし，家庭生活全体についての適応はさしてわるくない。家庭生活は気楽であると応答しており，親に対する信頼はかなりあるとみられる。
- 2 かくれた不平不満をもっている。
- 3 自信がない。
- 4 きびしい適応困難（学習，運動クラブの活動）などに追い込まれると，無断欠席，無断外泊などの問題行動に発展する。神経症的病状への逃避も考えられる。

## まとめ

問題行動をおこしやすい傾向をもつ生徒について何らかの指導を行ない，学校生活によりよく適応していくための方策が考えられなければならない。生徒の不適応傾向を知る手がかりとして集団ロールシャッハテストと適応性診断テストを新入生に実施してきている。その結果にもとづいて，生徒の指導を考えている。検査の結果はあくまで傾向を示すもので，実際に問題行動をおこすこととは違うわけであるが，多くの新入生について知ることは容易でなく，その意味でも客観的な診断が必要とされる。

これまでの検査の結果はかなりの確にその傾向を示しており，それに基づく指導の効果もあがっていると考えられるが，その結果をさらに有効に活用するためには，そのテストについての理解を深め，結果の解釈についてももっと研究すると同時に，次の段階として指導の方法，体制についてもきめのこまかい方法が必要とされる。

これまでも学年会や職員会議などで生徒理解と指導について啓蒙や関心を高めることにつとめてきた

が、テスト結果の活用について、より一層効果があがるようにするためには、ますます全職員の共通理解を深めていきたいと考えている。

#### 参考文献

「問題行動の早期発見」 文教書院

（ロールシャッハ（集団テスト）による予測 東山修二）

「研究紀要 第54集 子どものための教育相談 4」 新潟県教育研究所

（学校における児童生徒の非行防止対策の研究（Ⅱ） 東山修二）

「教研式 適応性診断検査 DAI 手引」 日本図書文化協会

「集団用 新訂 人格診断検査の手引」 金子書房

「講座 少年非行・2 児童生徒の理解」 明治図書

（生徒理解の方法 樋口秀雄）

「講座 少年非行・2 理解と診断」 明治図書

（心理テスト 樋口幸吉）